

教育研究業績書

2013年7月30日

月 日現在

氏名 浜畑 圭吾

枚中 枚目

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年 月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	概 要	編者・著者 名（共著の場合のみ記入）	該当 頁数
(著書) 1 件 『太平記』	共	平成19年	思文閣出版	龍谷大学大宮図書館寫字臺文庫蔵本は『太平記』の諸本の中でも特異な本文を持つことで知られる天正本系統に一本として、既に高橋貞一氏によって紹介されているが、本文はまだ出版されておらず、研究も進んでいない。そこでまず、龍谷大学本の調査と、巻一から巻二まで（以降欠巻のため）の本文を、同系統である天正本、野尻本、義輝本と比較、考察した。天正本、野尻本はそれぞれ調査に赴き、比較箇所を確認した。その結果天正本系統の中でも義輝本に最も近いことを指摘し、解説した。	加美宏	王 P 779 。 P 768 までは影 印、 P 769 ～ P 779 まで 解
(学術論文) 13件 ①「章綱物語と増位寺－延慶本平家物語生成考－」	単	平成17年 11月	思文閣出版	延慶本と長門本における増位寺の薬師靈驗譚である章綱物語と、平康頼の「卒塔婆流」に例話として挙げられている石塔寺の記述に注目し、『播州増位山随願寺集記』等の史料から、平安末期から鎌倉初期にかけて隆盛であった、阿育王信仰がその背景にあると論じた。		P 179 ～ 204
②「延慶本平家物語における「燈台鬼説話」」	単	平成18年 2月	龍谷大学『国文学論叢』	延慶本平家物語第一末廿五「迦留大臣之事」は、「燈台鬼説話」と呼ばれるものであり、「孝養」の説話とする『宝物集』に依拠した延慶本は、藤原成親・成経父子の例話としているのに対して、長門本や『源平盛衰記』は、俊寛・有王主従の例話としていることを検証した。さらに延慶本は「孝養」というモチーフで、本話と例話を繋げており、更に、長門本や『源平盛衰記』のような改変は行なわず、結末の異なる例話を示すことで、本話の悲哀を一層高めていると論じた。		P 15 ～31
③「平家物語「観賢僧正説話」考－『高野物語』と長門本・南都異本の関係－」	単	平成18年 7月	『中世軍記の展望』和泉	長門本と南都異本に共通する文言が、『高野物語』の本文と一致することを手掛かりに、『高野物語』の「老僧と小童」という設定を、長門本と南都異本の共通祖本が「老僧と維盛」に改め、「観賢僧正説話」を取り込んだと論じた。		461 頁～ 474 頁
④「龍谷大学図書館蔵『太平記』の研究」	共	平成18 年11月	『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第45集	龍谷大学佛教文化研究所指定研究「龍谷大学図書館蔵『太平記』の研究」（代表大取一馬氏）の一部として掲載。『太平記』の天正本の一本である龍谷大学所蔵本の特質を論じた。『太平記』諸本の中でも特異な本文を持つとされる天正本系統の中で、龍谷大学本は義輝本に最も近いと論じた。	大取一馬	P 17～ 24

⑤「長門本平家物語の慈念僧正による真済教化説話」	単	平成19年2月	『佛敎文学』第31輯	平家物語の殆どの伝本が、後鳥羽天皇即位の際、先例として挙げる「惟喬・惟仁親王位争い説話」において、長門本のみが惟仁親王の祈祷師恵亮の壇所に「平等坊」という特定の坊を設定していることに注目した。長門本はそのすぐ後に、「平等坊」と呼ばれることで知られる慈念僧正による「真済教化説話」を配しており、恵亮の壇所が、後の慈念僧正を意識したものであること、つまりは後日譚から発生した設定であることを論じた。またそうした説話配置が、長門本の注釈的な態度によるものとし、傍証として長門本のいくつかの独自記述が『古今和歌集』の古注釈と一致することを指摘した。	P1～12
⑥「南都異本平家物語「維盛那智参詣記事」の編集意図」	単	平成19年9月	『軍記物語の窓』第3集・和泉書院	従来研究の進んでいなかった平家物語の伝本南都異本の特異性を明らかにしたもの。南都異本は維盛が那智を参詣する場面に那智関係の文献を用いて独自記事を施し、維盛救済を目的とする本文を形成したと論じた。	P87～104
⑦「「狐めかし」と「つねめかし」―読み本系平家物語の生成に関する注釈―」	単	平成20年2月	『学苑』第47号	延慶本平家物語の「狐メカシ」は長門本と同文であるが他には用例が無く、南都本が「ツネメカシ」としている。「狐メカシ」は延慶本において孤例であり、他に用例も見あたらない特異な語である。しかし南都異本が同箇所を「ツネメカシ」とし、「ツネ」に見消をして「今」としていることに注目し、「狐メカシ」の「キ」が落ちて、「ツネメカシ」となったものを現存南都本の編者が「今」と訂正したと指摘した。さらに、これが語り本ではよりはっきりとした否定語である「しかるべからず」へと変遷していく過程を明らかにした。	P170～173
⑧「延慶本『平家物語』第六末廿三「六代御前高野熊野へ詣給事」の生成」	単	平成20年12月	『中世の文学と思想』・新典社	。平家が壇ノ浦で滅亡した後、嫡流である清盛の曾孫六代御前は、文覚の働きによって一度は助命された。その直後、六代御前は父維盛と祖父重盛の追善のために、高野山を経て熊野三山へと向かう。本稿では、この六代御前による高野熊野参詣記事で、延慶本が施した改変の跡を手掛かりに、延慶本生成の背景について考察した。その結果延慶本は平康頼著といわれる仏敎説話集『宝物集』を基にして加筆していることを指摘し、その方法を明らかにした。六代御前が、父維盛は出家を遂げているのだから救済されるはずだという主旨のことを述べた際に、延慶本は『宝物集』の中から出家に関する記述を抜き出し、六代のセリフに加えている。そしてさらに、出家に際し必要な菩提心の重要性を説いた記述をも抜き出して加筆している。	P227～246

⑨「長門本平家物語の「三鈷投擲説話」—『源平盛衰記』との比較から—」	単	平成21 年3月	『古典文藝論 叢』第1号	長門本平家物語の特異な「三鈷投擲説話」に注目し、その生成について考察したもの。「三鈷投擲説話」自体は平家物語諸本で繁簡の差はあるものの見られるものだが、長門本のそれは記事も多く特異な内容である。そこで本稿では高野山圖に伝承される中古・中世の三鈷投擲伝承の展開を確認し、特異な表現が発生する過程を明らかにした。長門本本文生成の背景を明らかにしたもの。	P47 ~61
⑩「西光廻地蔵安置説話の生成」	単	平成23 年5月	『唱導文学研 究』第八集・ 三弥井書店	『源平盛衰記』の独自記事である「西光廻地蔵安置説話」について考察したもの。鹿ヶ谷事件で処刑された西光は、平家物語諸本では救済されない存在として描かれているが、『源平盛衰記』のみが地蔵菩薩による救済を図っている点に注目した。その際、『源平盛衰記』の地蔵菩薩は「六地蔵」であり、従来これが六体の地蔵と考えられていたが、本稿では一柱六面の石塔であることを論証した。また、『源平盛衰記』には地蔵菩薩に関する独自記事が多く、同書の特徴として指摘した。地蔵菩薩は地獄に堕ちた者でも救うという仏であり、西光を救済するという同説話の問題の解明は、『源平盛衰記』の性格の一端を明らかにすることに繋がると論じた。『源平盛衰記』は独自の記事が多く見えるが、そのひとつひとつの基盤や生成背景は具体的に考察されるまでには至っておらず、本稿はそうした問題に取り組んだもの。	P132 ~ 156
⑪「西光と地蔵菩薩—神宮文庫本『沙石集』の生成—」	単	平成23 年10月	『典籍と資 料』・思文閣 出版	三重県神宮文庫に蔵されている『沙石集』はこれまで影印などで出版されることがなく、翻刻本文を一部確認できるのみであった。本論はその独自記事を取りあげ、生成について論じたもの。西光が「五条坊門」に地蔵を造像したという他に同話の見られないものであるが、『源平盛衰記』に類話がある。神宮文庫に調査に赴き、原本を確認したところ、当該説話は前後の説話と繋がりがあり、信心が足りない者は地蔵でも救済できないということの例話であったことを明らかにした。また、「五条坊門」に造像したとするのは、室町中期の地蔵信仰の隆盛期の壬生寺（五条坊門）の活動が背景にあると論じた。さらにこれを、『源平盛衰記』から近世六地蔵伝承へと至るその間に位置づけた。	P145 ~ 168

⑫「『源平盛衰記』「髑髏尼物語」の展開」	単	平成24年12月	『軍記物語の窓』第四集・和泉書院	関西軍記物語研究会編。『源平盛衰記』「髑髏尼物語」の展開として掲載。『源平盛衰記』の髑髏尼物語が先行の平家物語を基にしてどのように展開していったのかということを論じたもの。延慶本が最も古態を残しており、そこから長門本は親子の別離の物語へと展開、『源平盛衰記』は重衡一家救済の物語へと展開したと論じた。その根拠として、本来いないはずの重衡の子を設定し、妻（髑髏尼）がこの若君と重衡の後世を弔う記述となっていること、重衡の死と若君の死の場面で地蔵菩薩が関与している独自記述があることなどをあげた。また、『源平盛衰記』独自の配置が維盛との対比を意識しているとし、新たに『源平盛衰記』が加えた、維盛を意識した文言を指摘した。	P156 ～ 186
⑬「『源平盛衰記』「長光寺縁起」の生成」	単	平成25年4月	『國語と国文学』平成25年4月号	『源平盛衰記』では重衡が東下りの途中に近江国長光寺に参詣しており、さらにそこで長光寺の縁起が語られている。これは『源平盛衰記』の独自記事であるが、これまでその生成基盤などは考察されてこなかった。そこで本稿では聖徳太子伝を手掛かりに、同縁起が本来長光寺のものではなく、同じ近江国の「懷堂」の創建伝承に手を加えたものであることを明らかにした。さらに、東下りの途中にこれを配する理由について、維盛と重衡の対比であるとし、『源平盛衰記』は重衡を救済へと導いているとも述べた。	P57 ～69
(その他) ①平家物語研究展望	単	平成21年3月	『軍記と語り物』第45号	2006年10月から2007年9月にかけて出版された平家物語に関する著書、論文、その他資料を取り上げ、研究状況を概観したもの。	P 95 ～ 104
①『平家物語大事典』	共	平成22年11月		大津雄一氏・日下力氏・佐伯真一氏・櫻井陽子氏編。昭和53年発行『平家物語研究事典』以来の平家物語研究の総合事典。依頼項目は「輕大臣」「藤原章綱」「一の橋」「円覚寺」「老蘇森」「愛宕」「唐橋」「志賀」「篠原」「勢田」「増位寺」「比良山」「遍照寺」「法界寺」。	14項目

※著書、学術論文、その他の別で列記してください。枠内の()の位置は分量に応じて変更してください。

所属	文学部	職名	助教	氏名	浜畑 圭吾	大学院の授業担当の有無 (無)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日		概 要		
1. 数種類伝本を比較し、その差異に注目する。		2007. 4～現在		龍谷大学文学部開講「古典文学講読」において実施。文学作品の、特に古典作品のテキストが一つではないということを理解するため、講義者が毎回表を作成して講義。古典文学作品書写の背景と、伝本ごとの文学的な深まりが理解できるよう努めている。龍谷大学文学部開講「古典文学特殊講義」における学生アンケートの評価結果（最大値5）は次のとおりである。「授業に対する満足度」は4. 5ポイント（中央値3. 8）と高い評価を得た。また、「学生の理解度を高める努力」は4. 3ポイント（中央値3. 9）、「話し方の明瞭さ」は4. 3ポイント（中央値3. 9）と、ともに高い評価を得た。また、講義の後に質問を受け付けていたため、「質問できる機会を設けていたか」の項目は4. 3ポイント（中央値3. 8）の評価を得た。 学生の記述には「平家物語は一つでないことを知ったことが大きな収穫だった」「対観表を作って諸本を研究するということを知ることができてよかった」とある。ただし、「難易度は適切だったか」という項目については3. 7（中央値3. 6）であり、さらに努力している。		
2. 特定の場面を中心に『平家物語』を読む。		2008. 4～現在		相愛大学人文学部開講「日本文学講読」において実施。日本文学専攻以外の受講者や教職志望者が多いため、専門的な研究よりも内容の理解を目的とした講義。特定の巻を選び、前後の状況や政治的背景を説明しながら読み進めている。		
2. 作成した教科書、教材、参考書						
特記事項無し						
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 (直近2年のみ記す)						
特記事項無し						
4. その他教育活動上 特記すべき事項						
特記事項無し						

学会等および社会における主な活動		浜畑圭吾
《学会》		
龍谷大学国文学会	会員	
佛教文学会	会員 同本部事務局委員（2012年～）	
関西軍記物語研究会	会員	
軍記・語り物研究会	会員 運営委員（2009年～）	
中世文学会	会員	
説話文学会	会員	
唱導文学研究会	会員	
《社会活動》		
龍谷大学RECコミュニティー カレッジ大阪	講師	
龍谷大学高大連携室	高大連携担当講師	
兵庫大学やさしい文学講座	講師	
NPO法人いづみ健老大学	講師	